

## REVIEWS:

## 20年代とマサチューセッツの政治

大下 尚一

*Massachusetts People and Politics 1915-1933.*

By J. Joseph Huthmacher. (Mass.: Harvard University Press, 1959. Pp. 325.)

繁栄の20年代の政治は、ビジネスの侍者共和党全盛期として、無口な大統領 Coolidge ほどにも語らないのが特徴のように思われがちである。しかし、この時代の政治も、20年代におこるアメリカ社会の多くの変化をよく示しているはずである。本書はそのよい証拠である。

孤立主義、赤の恐怖、移民制限、人権の侵害、禁酒法、Ku Klux Klan など政治に関することからも、20年代をよく示すものとして個別に研究されても、歴史の文脈においては、時代の反動としてかたづけられがちであった。最近、20年代を、前の時代の反動あるいは大恐慌の序曲としてではなく、Roosevelt と Wilson の革新主義時代と、ニューディールとの間をつなぐ時期として評価しようという意図が、アメリカ史の連続を強調しようとする傾向とともにめだっているようにみえる。一方では、20年代に起った新しいものを認めようとする努力も、この時代からの強い要請である。著者が最近のアメリカ史解釈の傾向をどれだけ明確に自覚しているかは不明であるが、歴史家として必然的に求められる歴史の連続と非連続との認識という以上に、革新主義の時代とニューディールとの連続をさぐり、しかもそこに20年代の新しさを強調しようとしていることが、はっきりとうかがわれる。

「Roosevelt 革命のまえに Al Smith 革命があった」という Samuel Lubell のことばは、都市化、工業化され、多数の移民とニグロの人口に占められたアメリカ文明、即ち彼のいう「ニュー・フロンティア」によるアメリカの政治図のぬりかえが、20年代末にはっきりしたことをさしている。28年民主党の Al Smith は惨敗を喫するが、都市の票をみると、従来圧倒的多数であった共和党の得票数を、3万8千の差で破ったのであった。Huthmacher は、Massachusetts の政治を分析して、Al Smith 革命のまえに David I. Walsh 革命があったという。共和党の州が、Al Smith, Roosevelt を支持し、ついに Kennedy を生んだ民主党の州になった変遷をたどり、はじめて民主党をさへる州民の連携ができたのは、26年 Walsh が民主党か

ら上院におくられたときだという。これが、本書の中心である。1920年、アメリカ人口のわずか3.6%しかない Massachusetts ではあるが、都市化、工業化、移民化においては、「ニュー・フロンティア」の典型であり、それゆえに、民主党の中で特異な存在として位置した20年代の Massachusetts 民主党をとおして、アメリカ社会をうつしだそうというのである。

1920年の州をみると、人口の66.2%が2万5千人以上の都市に住み、州民66.8%が移民（1世代及び2世代）であり、土着民（old stock）は全体の31.9%で、アングロサクソン系及び西欧、北欧のプロテスタントがほとんどである。Massachusetts の社会構成は、(1) old stock——農村及び都市近郊の住宅地に住むプロテスタント、(2)アイルランド系——人口の1/3を1世代2世代だけで占め、都市に住むものがほとんどで、カトリック、(3)南欧及び東欧系の移民を中心とする多数の人種——都市中心に住み、非プロテスタント（Newer races: 便宜的に新移民と訳す）からなり、三者は互に反目しあっていた。old stock はプロテスタント的アメリカ文化の価値観を保持し、アイルランド系と新移民のアメリカ化に強い関心を示したが、アイルランド系はカトリック的生活様式をもち、新移民間も各人種グループごとに互に少数者意識をもって警戒しあっていた。old stock は共和党が中心で、そのためアイルランド系は民主党により、都市では民主党中心に政治力をもつが、国家的規模の政治には関心がなかった。新移民は政治意識が低く、自己の生活に直接利害関係があるときのみ、共和党でも民主党でも支持したが、一般に共和党の方が支配力をもっていた。そこにはアイルランド系への反感も原因している。12年 Wilson がはじめて勝つが、これは共和党の分裂によるもので、総数の35%を得たにすぎない。13、14年 David I. Walsh が知事に当選するが、アイルランド人でカトリックとしては最初のことである。彼は18年上院に当選したが知事は共和党にうばわれた。こうして民主党はアイルランド系を中心に共和党の州に橋頭堡をきずきはじめるが、まだ安定した基盤を確立してはいない。

第1次大戦では、Wilson の民族自決のスローガンがアイルランド系や新移民にアピールして、生国に対する関心をたかめたが、講和会議が進むにつれて幻滅に変わり、それは強い反 Wilson、反国際連盟となつてあらわれる。アイルランド独立問題やフィウメ問題に

対するアイルランド系、イタリア系の運動のみでなく、ギリシア系ポーランド系ユダヤ系等もみなアメリカ人としての意識よりは生国の理想を規準に不満を公然とあらわした。これらの運動に対する old stock の反感は、共産主義への強い警戒心と一緒にあって、100パーセントアメリカ化の強調となって台頭する。Wilson に忠誠を表明していた Walsh も19年10月 Wilson と袂別した。これに加えて戦後の経済問題は移民グループを一層失望させ、old stock との対立は強まった。20年、民主党大会では連盟と禁酒法に反対するが、満足すべき候補を選ばず、James M. Cox を支持したが、彼も補候になると移民の態度を非難しはじめる。Massachusetts の民主党の主流アイルランド系は、20年の選挙には協力せず、結果は、Massachusetts の民主党は分裂し、新移民とアイルランド系の票も失った。婦人参政権が与えられたが、移民系の婦人は余り関心を示さなかった。これは Harding の勝利と平常への復帰という結果以上に次の点で意味ある選挙であった。即ち、従来地方政治にのみしか関心を示さなかった移民が、生国への関心と戦後の幻滅の中で政治的に自己を自覚しはじめたこと及び、移民のかゝる態度に対する反感がアメリカ化の強い意識となって old stock にあらわれ、両者の連携が不可能となったことである。

Harding の平常復帰政策の不成功に対する反応は、22年の中間選挙における共和党勢力の全国的後退となった。Massachusetts では共和党の Lodge と知事の Channing Cox も当選したが、共和党政府への批判は Lodge に集中した感がある。彼の移民制限法の支持は新移民にも反感を与えた。しかし、民主党は党の統一を完全に回復せず、また共和党に対する争点を明確に見出しえぬまゝ、old stock で実業を代表する William Gaston を上院議員候補に、アイルランド系で党マシンの John F. Fitzgerald を知事候補に決定した。Fitzgerald は禁酒法反対のみを中心に選挙をすゝめたが、こゝに、どうして10年代に積極的に行なわれた革新主義的政策が州レベルにおいて後退したかが問題になる。

戦争の反動として、全国的に革新主義の退潮が現われるが、改革への倦怠、改革の達成に結果する新分野の縮小等の一般的傾向のほか、Massachusetts において顕著なことは、従来改革を可能にした支持票の分裂が明かになったことである。old stock を中心にする農村及び都市近郊の中産層と、都市のアイルラン

ド系及び新移民の連携が崩れ、革新主義政策がこの両者に分裂して進められた。というのは、革新主義政策には、政治制度の改革、独占の反対、福祉・労働立法のいずれも、その根源に二つの目的があった。即ち一つは old stock が、プロテスタント的アメリカの伝統的価値規準で、移民階級を経済的社会的に向上させようとするものであり、いま一つは、移民階級が自己の経済的社会的地位を向上させようとするもので、前者は、清教徒的伝統にたつて日曜日の安息日を強制し、禁酒を行ない、非プロテスタトの教区立学校教育にかかわってアメリカ的教育を課せようとするようなアメリカ化が主要であり、後者は労働者災害補償、労働時間制限等にみられる社会福祉・労働立法であった。改革の連携が破れたとき、移民または労働者が要求した20年代の立法活動は old stock の反対で阻止され、old stock が進めるアメリカ化の運動に対しては、移民は個人やグループの権利をまもる主張を掲げて反対した。また政府の介入への警戒は、かえって保守的な個人主義的主張ともなって現われた。

この州レベルにおける分析が、全国的図式にもあてはまることを、24年の選挙は明らかにした。保守的ビジネスと一部進歩的西部農民層を含む共和党、西部南部の農民と東部都市の移民層からなる民主党は、いずれも党内の統一を欠いた。こゝに La Follette を擁立する第三勢力が生れると同時に、民主党は K K K と手を結んで西部と南部を中心に McAdoo をたて、党勢を挽回せんとする勢力と、東部都市を中心に Al Smith をおして農村のプロテスタント的伝統と断絶せんとする勢力とに対立する。Al Smith に機未だ熟さず中間の候補 Davis がきまると Massachusetts 民主党アイルランド系主流は完全にこれを無視して、選挙は知事候補 James M. Curley と上院議員候補 Walsh の運動に焦点がうつる。州出身の大統領候補をもつ共和党は、Coolidge の圧勝を約束されている。結果は、Walsh, Curley とともに敗れたが、投票の分析は民主党の将来を明るくする。総投票数における Davis の25%は前回の Cox の29%より下るが、La Follette 支持票は Walsh, Curley を支持した票で、合計 37.5%、共和党 Coolidge の 62.5% は Harding の 71% より減少した。今一つ注目すべきは、禁酒と K K K 反対に集中して戦った Curley の 42.9% に対して、福祉、労働立法及び反移民制限法に集中した Walsh の 49.2% が同じ民主党でも票を多く得たことである。Walsh の対立候補は共和党の

Gillett で、彼は Coolidge の保護役として選ばれた点を考えると、Walsh の票はその強さを示している。二週間後 Coolidge のマシンから見はなされた憤慨のさめぬ間に老 Lodge はその生涯をとじた。Walsh には2年後に大きなチャンスが来るのである。26年 Lodge の空席を占めていた共和党の全国委員長 William Butler と Walsh は対決する。

25年になると Massachusetts の製靴、紡績業を中心に不況が深刻化した。Coolidge の一枚看板の繁栄は州では実現しない。ビジネスの代表 Butler への不信はおおいがたく、彼もまた対策をもたぬ。禁酒法反対は当然として表面に出さず、経済問題と労働問題に中心をおいた Walsh の戦略は功を奏した。Coolidge が投票のため帰州することに最後の希望を託した共和党をおさえて、Walsh は、アイルランド系及び従来相当共和党に流れた新移民の票を集めた。加えて労働組合のはっきりした支持と、old stock の自由主義者の票をも加えて、Walsh の連携が成立した。革新主義時代の連携は再編成されて民主党を支持した。この連携の上に28年 Al Smith の Massachusetts で の勝利は実現した。Al Smith はまさに革命という表現がある程度誇張でないほどの人気を州で博し、共和党は、Walsh, Smith を社会主義者と非難する選挙しかおこなえなかった。こゝに見おとせないのは、すでに Walsh にみられるごとく、28年は民主党が従来の西部的 KKK と禁酒とを破棄しただけでなく、伝統的関税、税制政策に可成の修正を加え、東部のビジネスとの妥協を試みたことである。しかし、Smith の対決は全国的にみれば西部のみか南部をも失い、old stock のイメージとビジネスにつながる Hoover の勝利におわった。

大恐慌に処して民主党は東部の都会の Smith より、西部と old stock のイメージにかなう Roosevelt を選んだ。Massachusetts の民主党では、Smith をおす Walsh 一派の主流が、Roosevelt を擁立した Curley に地位をゆずり、党の統一は再び重要な問題となる。しかし、Roosevelt はその<sup>後</sup>指命のときではなく、恐慌対策とニューディールの建設事業の中で、西部及び東部、即ち Old stock と移民とを結ぶ象徴になった。恐慌を経てはじめて両者は統一の基盤を見出したのである。

さて本書は、すでに見たように革新主義からニューディールに至る著者の図式によって構成されている。

第一に、革新主義に対する都市の役割、とくに従来否定的役割を演じたかに思われていた移民の果たした力を評価している。(これは著者が “Urban Liberalism and the Age of Reform” in *Mississippi Valley Historical Review*, vo.1. XLIX, No 2 で、62年に指摘している。) 第二に、20年代に革新主義が退潮することはみとめるが、この都市の移民の評価によって、ニューディールとの連続をみとめることである。

本書はこうした図式を物語りの敘述の中におこりだのが特徴であるが、それが短所と長所である。物語りの敘述のために、一州のこまかな事件や人物のこゝろが生かされて興味はあるが、そのためかえって論旨が明瞭でなく(これは結論の章で整理してよくまとめているが)、また図式にあてはめるために人物や事件がそれぞれ型にはまっいて、物語の敘述としての描写に力を発揮しえないところがめだっている。Walsh の人物が浮彫りにされていないのも、また党のマシンについてもほとんど書かれていないのも、敘述形式による点が相当原因しているのではないか。社会学、政治学などの新しい成果を十分とりいれた民主党物語りといった、感じがのこる。最後に、Walsh の評価は妥当にしろ、大恐慌が早くきていれば、共和党から民主党にはやく勝利がうつったであろうというのはあまり当然のことだという評価を Hofstadter がしたら、著者はなんと答えるであろうか。

やゝもすると理論で時代像をえがきがちのわれわれには、大変意味ある著書であり、また、20年代の数少い政治史の中で、研究として十分価値を認めたい労作である。

## 研究所報

§ アメリカ研究所では過去数年間諸事業の一つである公開の研究会、講演会を主催してアメリカン・スタディーズへの関心をたかめることに留意してきた。その主なものは次のとおりである。

- 1920年代の背景 Otis Cary (59.6)  
 日米労資関係について Solomon B. Lavin (59.7)  
 ニューイングランド諸大学におけるアメリカン・スタディーズ・プログラム 大下尚一 (59.9)  
 ヨーロッパにおけるアメリカ研究  
 伊藤規矩治 (59.11)  
 1920年代のアメリカ Merle Curti (59.11)  
 戦後アメリカ経済社会の構造的変化  
 野間俊威 (60.4)

- 伝記研究 Donald Bartlett (60.5)  
 アメリカの大統領 Saul K. Padover (60.8)  
 アメリカ革命及び憲法制定 Merrill Jensen (61.5)  
 アメリカにおける協同組合運動について  
 Colston E. Warne (62.5)  
 アメリカにおける人事管理について 中条毅 (62.5)  
 アメリカにおけるアメリカ的なるもの  
 小野高治 (62.6)  
 失われた世代の作家達 松山信直 (62.10)  
 日米賃金問題の比較 Arthur Ross (62.10)  
 アメリカの地域開発 笹田友三郎 (62.11)  
 アダムズ家の人々  
 中屋健一・三浦進・志邨晃佑 (62.12)  
 アメリカにおける日本研究と日本におけるアメリカ  
 研究の比較 Albert Craig (63.1)  
 アメリカと国際法 高橋悠 (63.6)  
 以上のうち Bartlett, Jensen 教授の場合は2日～  
 3日にわたり数回連続で講議がおこなわれた。今後も  
 このような企画を充実していきたい。  
 § 研究所は本学年度より麻田貞夫研究員 (Ph. D.,  
 Yale University) を専任に迎えた。

## 編集後記

同志社アメリカ研究第1号は1920年代の特集であるが、論文は文学関係のみに限られた。これでは特集としては淋しすぎるが、今後の編集がどんなかたちをとるにしろ、20年代に関する研究論文は続けて発表される予定である。

機関誌発刊の企画が具体化して一年近くなる。座談会も前学年末の忙しい最中に無理におこなったのであったが、発刊が今日までおくれでしまい、執筆者にも御迷惑をかける結果になった。もうすこし、アメリカ的スピードでやれる方法を考える必要がある。

表紙のデザインは京都市立美術大学の中井貞次氏に御協力いただいた。

なお編集企画はアメリカ研究所実行委員会がおこなう、編集には、松山信直、野間俊威、柏博、大下尚一があたった。創刊号としては、不備な点が多いことであろうが、大方の御批判と御協力をえて、第2号が充実したものになるよう期待する次第である。 S. O.

### 執筆者紹介

上野直蔵	文学部教授(大学長)	英米文学
木村俊夫	文学部教授	英米文学
松山信直	文学部専任講師	英米文学
岩山太次郎	文学部専任講師	英米文学
大下尚一	文学部専任講師	アメリカ史

### 同志社アメリカ研究第1号

1963年9月25日 印刷

1963年9月30日 発行

編集・発行者 同志社大学アメリカ研究所  
 京都市上京区烏丸今出川

印刷所 協和印刷株式会社

定価 150円